

トレンド提言

参議院議員選挙、東京都知事選について考える

7月は参院選が6月22日に、都知事選は7月14日に告示される（投開票：参院選7月10日、都知事選7月31日）。いずれも今後の国政に影響を与える選挙である。

以下問題点を考えてみたい。

参議院議員選挙 69年間の歴史

・1947（昭和22）年2月24日

参議院議員選挙法が公布された。新憲法によって新しくつくられた参議院の議員選出は、世界でもめずらしい全国区制がとり入れられ、定数250を全国区100、地方区150に分け、任期は6年でそれぞれ3年ごとに半数改選される。被選挙権は30歳にきめられた。

・1947年4月20日

第1回参議院議員選挙が行われた。結果は、社会47、自由39、民主29、国民共同10、共産4、諸派13、無所属108であった。5月17日に無所属議員は緑風会を結成。昭和23年8月に政治団体として届出た。

現状の参議院各政党・会構成（ ）は女性議員

会派名	議員数	平成28年7月25日任期満了			平成31年7月28日任期満了		
		比例	選挙区	合計	比例	選挙区	合計
自由民主党	116(16)	12(4)	38(3)	50(7)	19(5)	47(4)	66(9)
民進党・新緑風会	64(9)	19(1)	27(4)	46(5)	8(3)	10(1)	18(4)
公明党	20(3)	6(0)	3(1)	9(1)	7(1)	4(1)	11(2)
日本共産党	11(4)	3(1)	0(0)	3(1)	5(1)	3(2)	8(3)
おおさか維新の会	7(0)	2(0)	0(0)	2(0)	3(0)	2(0)	5(0)
日本を元気にする会 ・無所属会	4(0)	1(0)	1(0)	2(0)	2(0)	0(0)	2(0)
日本のこころを 大切にする党	3(1)	0(0)	0(0)	0(0)	2(1)	1(0)	3(1)
社会民主党・護憲連合	3(1)	2(1)	0(0)	2(1)	1(0)	0(0)	1(0)
生活の党と山本太郎と なかまたち	3(1)	1(1)	1(0)	2(1)	0(0)	1(0)	1(0)
無所属クラブ	2(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	1(1)	2(1)
新党改革・無所属の会	2(0)	1(0)	0(0)	1(0)	0(0)	1(0)	1(0)
各派に属しない議員	7(2)	1(0)	3(0)	4(0)	0(0)	3(2)	3(2)
合計	242(38)	48(8)	73(8)	121(16)	48(11)	73(11)	121(22)
欠員	0	0	0	0	0	0	0
総定数	242	48	73	121	48	73	121

参議院選挙にどのように臨むべきか

選挙の争点は立場によって異なるだろう。近々各政党の政策、公約が発表されるだろうが、有権者、国民は国民主権の自覚を高めて選挙に臨まなければならない。

○基本的に心得ておきたいこと

・参政権の行使

投票は参政権の行使である。この権利は戦前からの長年にわたる国民的要求が実現されたものである。世界には国民に参政権が認められていない国もある。民主主義を標榜するアメリカではリンカーンのゲティスバーグスピーチ（1863年）から1世紀を経た1963年、キング牧師の犠牲の上に黒人にも平等な参政権が認められたのである。

投票の棄権とは正に獲得した権利（利益）を放棄することである。

選挙制度の問題や選ぶにふさわしい候補者が見当たらないことなど棄権の理由があるにせよ、政治に参加する権利を自ら放棄することとなる。

従って選挙結果についての責任は棄権者が負わねばならない。

国民の要求、主義主張を実現する方法（政治に参加する方法）としては、現状では選挙が有力な唯一の制度（この他請願権などもあるが）であることも承知しておかねばなるまい。

従って投票行動は権利であるとともに、そこには同時に責任があるのである。

・政党政治

現代の政治は政党政治となっている。選挙は政党の掲げる政策、公約の中から優先順位をつけることになる。

政策には当面実現しそうなものやスローガンのものやプロパガンダにすぎないものもある。隠された争点もある。有権者としては政策の真意を含めて「全てのは疑い得る」というスタンスが求められる。また政党は一定の支持勢力の要求を実現するための政治集団であるから、各政党の支持基盤がどのような実態であるかを見極めることが大切である。

・候補者の選定

候補者を推薦する立場としては一口に言えば当選できる人ということになる。

そのためには政治家としての資質（政策立案能力、実績）も大事なことだが、選挙に勝つためには演説が上手いこと、風貌容姿がよく、カッコよく、テレビ映りがよいこと。スポーツや芸能界などで有名となり、スター性が高いことなどが選考基準になっている政党もあるという。

本来参院は良識の府とされ、見識の高い人物が選出されたが、今や衆院の補完的機能としてあるいはコピー的存在と化し、政権政治下では議員の数合わせの場となっている。

このような事態は議会制民主主義の危機と言わねばなるまい。

国民の求める政治家像を考えてみたい。

- 一部の人たち、特定分野の利益代表ではなく「全体の奉仕者」（憲法第15条2項）にふさわしい人
- 国民の代表、良識の府の構成員として知性、理性、そして品性を保持できる人
- 一定の専門性を持ち、政治家を職業（報酬を生活の糧とする）とせず健全に生きられる人
- 内外における価値観の多様化、ダイナミズムに対して偏らず寛容な政治姿勢をもって行動できるリベラルな人
- 憲法の基本（国民主権、基本的人権の尊重、平和主権）を遵守（憲法第99条）できる人

○選挙の争点はどこにあるか

安倍政権は最優先テーマとして「この道しかない」とアベノミクスの推進を参院選の目玉とするようだ。

国の実情からすれば、アベノミクスによる「景気好循環論」に大きな不安と疑問をもっている。「金が天下の回りもの」となる日が金融政策を中心とした成長計画からは見えてこないからだ。

アベノミクスで一部大企業はこの間の円安傾向などにより業績を上げ内部留保(約360兆円)を増やしたが、国民の金融資産は減少するなど格差社会が拡大している。「カネは天下の回りもの」となるのか「待てど暮らせど来ぬ人を」とならないか。

消費税増税延期政策には反対は少ないが、社会保障との一体改革、政策はどこへ消えたのか。超高齢化社会の進行による介護問題は自治体任せで済まされるのか。

大論議をした TPP 問題は農業畜産業の不安を残したまま。「1億総活躍社会」なるものも女性が働く環境づくりが未整備だ。

山積する国民的課題を残したまま、6月1日に国会は閉会し、参院選に突入することになった。

こうした参院選の争点をどこに求めるかである。

周知のように昨年の国会論議の焦点は「安保法制」だった。

憲法改正（自主憲法制定）を党是とする政党としては今回の参院選では、これを実現するためのチャンスと位置づけることは当然のことだろう。

つまり**憲法改正発議に必要な議員数（衆議院参議院の総議員の2/3）を確保するための選挙**と言える。衆院では既に与党が2/3を占めている。

因みにかつて安倍政権は憲法第96条の憲法改正発議要件の変更を試みたが、世論の動向により「転進」した経緯がある。

憲法第96条【改正の手続、その公布】

①この憲法の改正は、各議院の総議員の3分の2以上の賛成で、国会が、これを発議し、国民に提案してその承認を経なければならない。この承認には、特別の国民投票又は国会の定める選挙の際行はれる投票において、その過半数の賛成を必要とする。

②憲法改正について前項の承認を経たときは、天皇は、国民の名で、この憲法と一体を成すものとして、直ちにこれを公布する。

いわば憲法改正のためには「急がば回れ」外堀から埋めていこうという戦略と言える。マスコミではこれを「隠れ争点」と呼んでいる。

今回選挙の最大の争点は憲法改正勢力が参院でも2/3を占めることになるか否かである。

沖縄をめぐる問題（地位協定の見直し、辺野古への基地移転等）は**全国民的な課題**でありながら争点とされていないことは見逃してはならない。

東京都知事選 —舛添知事の辞任から学ぶ—

○舛添知事辞任のあらまし

戦後19代の舛添要一都知事が6月21日辞職となった。

辞職に追い込まれた原因は「政治とカネ」問題といわれているが、加えてカネの使い方をめぐる人間性が問われたとみるべきだ。

具体的には海外出張の多さとその際の航空機利用（ファーストクラス）や高級ホテルのスイートルーム利用にはじまり、公用車を使っての毎週の湯河原別荘通い、あるいは家族旅行の宿泊費に政治資金を充てた公私混同問題。

「客室で事務所関係者らと緊急かつ重要な会議をした」が誰と懇談したかについては政治の機微にふれることで明らかにできない、とし「作り話ではないか」と疑惑を深めたことなどである。いずれも調査、報道したのは週刊誌「文春」だった。

舛添という人物の一連の行動は東京都知事という身分、地位を利用して物欲、金銭欲、名誉欲、利己心を充たしたものであり、その方法は欺瞞性をもった詐術的なものだった。このことに「厳しい調査」を依頼された弁護士は「適法だが、不適切」との報告をした。世論は「お手盛り調査」と失笑した。

法律家の立場からは一連の言動は「実質的に違法性があり反社会的行為」と断ずるべきではなかったか。

以上に関して都議会はことの真相を糺すことなく知事を辞職させることで幕引きを演じた。

集中審議や百条委員会設置を放棄したのは審議により藪蛇となるからだろう（後記参照）。正に「クリーンハンド」の原則（自らの手がきれいであれば相手を責めることはできない）に反するからだ。

これでは国民、都民が求めた知事の説明責任は放免されたことになる。

残された舛添知事に対する印象は「せこい」だった。

「せこい」とは？ 辞書を引いても出て来ない。「ずる賢い」「誠意のない言動」「欺瞞的言動」などの内容をもった現代的な複合語なのか。関西方面では「ずるい」「ケチ」という意味で使われている。都知事のあり方以前に一人の人間としてあるまじき人物に付けられた表現といえよう。こういう人物を都知事に選んだ政党、都民の見識が問われその責任の大なることを確認しなければならない。

同時に知事部局を監視すべき立場にある都議会、議員の反都民的行動が舛添知事の独善的行動を助長してきたことも明白となった（詳細後記）。

○問題の所在と教訓

- ・ 今回の顛末についての都議会の責任は大きい。都議会議員は「二元代表制」（首長と議員はそれぞれ直接選挙で選ばれる）のもとで知事、議員に対する監視機能が弱い。特に多数与党が知事を推薦しており、知事を追求することはその政治的、道義的責任が自らにはね返ってくる。

だからことの真相を明らかにすることなく幕引きをしたのだろう。

だが、知事を推薦したという責任（製造物責任）は今後とも時効とはなるまい。

- ・ 幕引きのタイミングは参院選の直前であり国政に悪影響を及ぼしてはならずという中央政府の判断が決め手となったとみられる。
- ・ 都道府県議会議員は最高額の報酬や政治資金が支給されている。特に都議会議員は国会議員並（知事は総理大臣並）の待遇を受けている。同時に出張時の待遇（ロンドンオリンピック視察等）や公用車の利用についても舛添知事類似の問題があるのではないかと推測される。現にリオオリンピックに自民16名はじめ多数の都議の出張にマスコミ批判が始まっている（取り止めの動き）。因みに1965年(昭和40年)には都政刷新都議会解散事件があった(後述)。
- ・ 今回は一連の舛添知事問題で、政治とカネ問題は現行の「政治資金規正法」「政党助成法」「あっせん利得処罰法」では支配が及ばない「聖域」であることが判明した。これを契機に「ザル法」の改正が求められる。同時に都議会の刷新なしには都政の刷新はあり得ないのである。

○戦後都知事の変遷

代数	氏名	任期初日	任期終日	出身		
初代	安井誠一郎	1947年4月14日	1959年4月18日	岡山県	内務官僚	統治能力が優れ、戦後の東京復興に尽した。お座敷政治の始まり
4代	東龍太郎	1959年4月23日	1967年4月22日	大阪府	学者	都議会議員の横暴を抑えられなかった。都政刷新、議会汚職解散
6代	美濃部亮吉	1967年4月23日	1979年4月22日	東京都	学者	クリーンな都政を掲げ、赤字削減に尽力
9代	鈴木俊一	1979年4月23日	1995年4月22日	山形県	官僚	メディア選挙の始まり 磯村尚徳NHKニュースキャスター 対抗馬で立候補
13代	青島幸男	1995年4月23日	1999年4月22日	東京都	放送作家	知名度優先の選挙始まる
14代	石原慎太郎	1999年4月23日	2012年10月31日	兵庫県	作家	スター的存在、実務は都の職員任せ
18代	猪瀬直樹	2012年12月16日	2013年12月24日	長野県	作家	医療法人から5000万円を受け取ったことで辞職
19代	舛添要一	2014年2月11日	2016年6月21日	福岡県	学者	特権を濫用、独善におぼれた

○都政史の汚点（1965年）

都議会議長選をめぐる不正事件で東京都議会は解散を可決した。3月9日に行われた都議会自民党内の議長候補選出で、小山貞雄議員が藤森賢三、加藤好雄の両議員を破って当選したが、3月15日、藤森議員が同僚議員への贈賄容疑で、ついで翌日には2議員が収賄容疑で東京地検に逮捕された。議会閉会后、3月30日に3議員、4月7日に2議員、4月16日は小山議長も贈賄容疑で逮捕された。

このような都議会の腐敗ぶりに都民の間には責任追及の声が高まり、小山議長の逮捕まで及ぶに至って都議会の解散を強く要求し、5月14日には学者、文化人らの「都政刷新市民委員会」の結成をはじめとして、自主的な都民組織がぞくぞく誕生した。このため中央政界でも事態を無視できなくなり、自民、民社、社会三党間で多数決で解散できる道を開くことで意見が一致、6月1日、「地方公共団体の議会の解散に関する特例法」が国会を通過し、これにより都議会は6月14日、解散を決議した。

選挙は7月23日行われ、自民党が3分の1に満たない38人に転落し、社会党が45人の当選で第一党となった。公明党23人、共産党9人、民社党4人、無所属1人であった。

○都知事選のあり方

- ・既にみたように知事選挙は1991年にテレビの普及もありメディアがリードする選挙となり、1995年頃からはテレビ出演で有名になった人、知名度の高い人が候補になることが多くなった。舛添知事もテレビに始まり、テレビに終わった一人である。都知事にかぎらず選挙に関しては立候補から投開票に至るまでマスコミがリードし、国民、有権者を支配している時代である。権力者も含めてこの流れに恐々としている。望むらくは「調査なくして報道なし」。偏らず公正なそして正確な報道を期待したい。マスコミの調査能力を活かして候補者への取材を徹底してもらいたい。
- ・東京都は人口1,300万人、都庁の職員約16万人、財政規模(特別会計を入れて)13兆円、内外の資本が集積された世界最大の都市だ。この都市の知事(大統領制)を選出するには政治家としての資質を含めて多角的な視点からの判断が求められる。ところが選挙期間が17日しかない。これでは知名度を頼りマスコミに依存するしかない。米大統領選は1年がかりで行われる。都知事選も相当な選挙期間を設けるべきだろう。これまでの失敗をくり返してはならない。

○都政の課題

- ・都政、都議会の刷新
- ・豊かな財源を高齢化、子育て対策に
- ・防災対策
- ・都民は都政に関心を深め、都知事、都議会への監視の目を強めること

第 65 回施設・工場視察、業際間交流会

当センターでは、「企業と国民・生活者が相互に理解を深めるために、生産者は消費者の立場を、消費者は生産の原点を正しくとらえることが肝要である」との考えから、標記「視察、交流会」を実施してきた。

今回のテーマは九州地方におけるエネルギー事情並びに地域活性に関する視察であった。

実施時期は6月8日～10日で、4月14日に発生した熊本地震の復旧も進行中であった。本来なら熊本地震の災害復旧状況視察を旨とすべきだったが企画が昨年からスタートしたこともあり、実現には至らなかった。

ただ、後の報告にもみられるように九州新幹線の運行状況、熊本、大分への観光客減少など、震災の影響の一端に接することはできた。

視察箇所概要

○九州電力川内原子力発電所

川内原子力発電所は、九州では玄海原子力発電所に次ぐ2番目の原子力発電所として、1号機（89万kW）が昭和59年7月、2号機（89万kW）が昭和60年11月に営業運転を開始しました。

東日本大震災後の平成23年5月と9月にそれぞれ定期検査に入ったあと、原子力規制委員会の新規制基準が施行された平成25年7月8日に、適合性の審査を受けるための申請を行いました。

その後、原子力規制委員会による審査会合（71回）や原子力規制庁によるほぼ毎日のヒアリング（913回）等を経て、漸く平成27年9月10日に1号機、11月17日に2号機が通常運転に復帰いたしました。

申請した書類の分量は、審査会合・ヒアリングでの意見等を反映した結果、最終的には、原子炉設置変更許可関係（基本設計）が約8,600ページ、工事計画認可関係（詳細設計）が約59,000ページ、保安規定変更認可関係（運用管理）が約500ページにも達しました。

対応体制としては、東京に2か所の分室を新たに設けて最大約260名が連日の過酷な作業に従事したほか、合計で最大約530名が専任で対応してきました。

今後とも、安全確保を最優先とした発電所の運営を行ってまいりたいと考えております。

○九州電力八丁原発電所

八丁原発電所は、わが国最大の地熱発電所として、1号機（55,000kW）が昭和52年6月に、2号機（55,000kW）が平成2年6月に営業運転を開始しました。

また、平成18年4月には、発電所構内に、八丁原バイナリー発電所（2,000kW）を運開いたしました。

地熱発電とは、化石燃料を全く使わずに地下から取り出した蒸気を利用するクリーンな発電方式で、言わば火力発電のボイラーの役割を地球が果たしているようなものです。具体的には、マグマの熱で高温になっている地下岩盤の地下水を蒸気井で取り出して発電に使い、残った熱水を再度地下に戻すものであり、地熱という国内資源を有効に活用した発電方法と言えます。

バイナリー発電とは、地熱流体（蒸気と熱水）を熱源として沸点の低い媒体を加熱・蒸発させ、その蒸気でタービンを回し発電するものです。この発電システムにより、従来の地熱発電方式では利用することができなかった低温の蒸気や熱水での発電が可能になりました。

○ホンダ太陽株式会社

ホンダアールアンドデー太陽株式会社

～基本理念～

－何より人間－ 夢・希望・笑顔

We are the Creative Challengers.

この世に「障害者」という人種はいない。また同じ人は一人もいない。

人にはそれぞれ他にはない固有の素晴らしい「持ち味」がある。

その違いを認め合う中に、一人の人間としての自立が生まれる。

例え心身に障害はあっても人生に障がいはない。「障害者」としてではなく「一人の人間」として社会に役立ち、普通に生きてゆく。

これが私たちの目指す「何より人間－夢・希望・笑顔－」です。

【会社概要】

社 名／ホンダ太陽株式会社

所 在 地／大分県速見郡日出町大字川崎3968

設 立 日／1981年（昭和56年）9月25日

資 本 金／3,000万円

代表取締役／星野 博司（ほしの ひろし）

従業員数／198名（内：障がい者数94名）

（重度56名／軽度22名／知的11名／精神5名）

仕事内容／2輪（バイク）4輪（自動車）汎用（生活に役立つ製品）の部品製造
データ領域業務（二輪車のデザインデータ作成・各種電子化）

1995年6月設立 2008年8月設立 2014年4月設立

【第1工場棟】

【第2工場棟】

【データビジネス棟】

○城下かれいと的山荘

「城下かれい」

別府湾の海中に清水が湧くところがあり、そこに育つマコカレイは、他の場所のものとは異なった特徴を持っている。これが全国に知られた『城下かれい』である。

全国的に有名になったことで供給が追いつかず、現在は養殖もしている。

「城下」とは戦国時代に陽谷城（木下系）と言う城が別府湾に面してあり、その城跡の眼下に生息するかれいということである。

「的山荘」

城下町の名残を静かにとどめる三の丸の一画に、巨大な塀に囲まれた日本家屋が、ひときわ風格をただよわせている。城下かれいの料亭として全国的に知られた的山荘である。しかし、この的山荘、料亭として開業したのは昭和39年のことで、その歴史はさらに大正時代までさかのぼる。

的山荘は大正4年（1915）、馬上金山（杵築市山香町）で巨額の富を築いた成清博愛なりきよひろえが建てた別荘で、穏やかな別府湾を一望する広大な敷地に、近代和風の豪華な日本家屋、そして別府湾や高崎山を借景とした見事な庭園が広がる。的山荘の名は、博愛が「的山」と号し、漢詩をよくしたことに由来する。「的山」には、鉦山を当てるという意味があるといわれている。

参加者

工藤 芳郎	(一社) ぐらしのりサーチセンター	副会長・専務理事
近藤 忠司	関西電力(株) お客さま本部	お客さまサービス部長
佐藤 良一	(株)日立製作所 グローバル渉外本部	渉外部 部長
深尾 修	本田技研工業(株) 渉外部	担当部長
服部 剛	九州電力(株) 東京支社 営業グループ	グループ長
菊本 哲雄	東京急行電鉄(株) 鉄道事業本部 事業戦略部	総括課 主査
日野 裕司	全日本空輸(株) 総務部	総務チームリーダー
紙本 達宏	東日本旅客鉄道(株) 鉄道事業本部 サービス品質改革部	課長 CS推進グループ
岩崎 健	(一社) 日本自動車工業会 総務統括部	企画・調査担当 グループ長
松田 高幸	九州電力(株) 東京支社 営業グループ	副長
相馬 春樹	東京ガス(株) リビング本部	お客さまサービス部 お客さま相談室 課長
河崎 大平	関西電力(株) お客さま本部	お客さまサービスグループ お客さまサービスセンター所長
阿部 雄介	四国電力(株) 東京支社 業務課	副長
宮城 喜一郎	沖縄電力(株) 東京支社 業務企画グループ	リーダー
松浦 信一	大阪ガス(株) 東京支社	副課長
宮澤 弘	電気技術開発(株) 電力技術本部	上席執行役員本部長 変電部 部長
杉 行夫	JAPAN NOW 観光情報協会	理事 事務局長

学んだこと

工藤 芳郎

○川内原子力発電所再稼働

この原子力発電所は稼働中のものとしては現状では日本唯一となっている。

もともと稼働停止はこの原発に欠陥や事故があったことに因るものではなかった。

東北大震災、福島原発の稼働停止の教訓を得て、原子力規制委員会等の厳しい安全基準が策定され、これをクリアーするために九州電力、関係者の懸命なる努力の積み上げにより今日に至ったのである。

地震や津波等自然災害に対する対策は人的、物的資源が注ぎ込まれている。

過剰防衛ともみられるが、安全対策に過ぎたるはなしと言える。

政府はなおエネルギーミックスの策定に悩んでいるが、原子力発電の果す役割は引き続き重要であるとみられる。

地域経済社会への貢献も大きく期待されている。

電力事業の使命である公益性（安定供給、公平な価格、サービスの提供等）を重視し健全な事業の進展を期待したい。

○八丁原地熱発電所

今回の視察では「再生可能エネルギー」「新エネルギー」の一環と位置づけた。

だがこの発電所は1960年代に開発され、1970～80年代にかけてのオイルショック時に拡充された経緯がある。

発電量としては現状ではわが国最大の規模であるが、総電源に占める割合は増加してはいない。

この事業で発生する温水、熱を地域の観光、スポーツ施設に活用することも考えられる。（アイスランドの地熱発電所では温水プールや家庭用水として利用されている）

○ホンダ太陽株

この企業の基本理念は前記のように「—何より人間— 夢・希望・笑顔」でまことにすばらしい。

本田技研工業(株)が創設した社会的事業でCSR活動、社会貢献活動の見本と言える。

事業には人、もの、金が必要とされ、現代社会では企業は利益至上主義に走っている。こうした中、ホンダ太陽の工場では障がい者の人たちが人間として生き生きと働いていた。五体満足な人の中には利己主義、利益、名誉欲を追い求める政治家などもみられる。ホンダ太陽の視察をしてもらいたいものだ。

この工場からは車いすマラソン、パラリンピック選手も輩出されている。

このことについて大分一別府間を案内したバスガイドは別大マラソンについては紹介したが、車いすマラソンについての説明がなかったことは残念なことだ。

○首長との懇談

- ・大分県知事（広瀬勝貞）を訪問（6月9日）、約40分にわたり熊本地震の影響、大分県政の状況について説明をいただいた。

同氏は通産省時代から当センターと密接な提携をもっており、経済産業省事務次官を歴任された。

- ・大分県速見郡日出町長（工藤義見）からは有名な「城下かれい」の養殖場を紹介していただき、併せて人口動態など地方都市の課題について説明を受けた。当センターの視察企画としては地方の首長との懇談は少なく、参加者としては貴重な経験になったと言える。

広瀬大分県知事との懇談



【広瀬知事略歴】

昭和17年(1942)	日田市豆田生まれ	平成 6年(1994)	通商産業省貿易局長
昭和41年(1966)	東京大学法学部卒業	平成 9年(1997)	通商産業省機械情報産業局長
昭和41年(1966)	通商産業省入省（現・経済産業省）	平成11年(1999)	通商産業省事務次官
昭和51年(1976)	在スペイン日本大使館一等書記官	平成13年(2001)	経済産業省事務次官
平成 3年(1991)	中小企業庁計画部長	平成14年(2002)	経済産業省退官
平成 3年(1991)	内閣総理大臣秘書官	平成15年(2003)4月	大分県知事当選就任



▲
広瀬知事

○地方都市と東京

毎度のことだが羽田空港に到着して都心に向かうとき実感することがある。

走っている時間よりも留まっている時間の方が長いのではないかとおもわれる。

交通渋滞、座って居ても立って居ても同じ運賃、街中でも電車の中でも横行するスマホ症状…。何でこんな東京を好んで人口が集中するのだろうか。

地方は山あり、川、自然は豊かで住みやすい。だが職場が少なく、若者たちは仕事を求めて都市へ移動する。残された者は高齢者たち。介護問題は大きな社会問題。地方自治体に任せては「老人は死ね」と聞こえてくる。

参加者の感想

四国電力(株) 東京支社 業務課 副長
阿部 雄介

この度は貴重な視察と交流会の機会を頂き有難うございました。

今回の視察で印象に残ったのは、まず、川内原子力発電所の見学でした。

規制基準を満たすための様々な工事・施設や活気のある現場に触れ、同じ業界の人間として我々も早く伊方原子力発電所を再稼働させ、後に続かねばとの決意を新たにしました。

また、ホンダ太陽も印象的でした。不勉強ながら、今回の見学により始めて同社を知ったのですが、障がいのある人の社会的自立の促進を目指しつつ、会社としても収益を上げていくという同社の姿勢、また、障がいのある人とともに運営しているからこそユニバーサルデザインや省力化機器の作成などを提案できる強みなどを教えて頂き、企業の社会貢献の1つのあるべき姿として目から鱗がとれました。

さらに、大分県知事や日出町長など、今後、私の人生でなかなかお会いする機会がないであろう方々に、間近でお話しをお伺いすることが出来たのは貴重な経験となりました。

業際間交流会では、普段くらしのリサーチセンターの講演会の場でお会いする方々とじっくりとお話しできる機会を持って、良い刺激になりました。

やはり、普段はどうしても自分の業界周辺の人間と話すことが多く、結果として視野が狭まりがちとなるため、こういった場で、しかも著名な企業の先輩方のお話しをお伺いできるのはより経験となりました。

今後も、普段我々だけでは見学したりお話しをお伺いすることができない企業や人を、こういった視察の場でご紹介頂ければ、知見が広まるとともに、今後の業務にもフィードバックできようかと思いますのでこれからも定期的に視察を開催頂ければ幸いです。

▼ 施設・工場視察について

- ・これまで「原子力発電所、地熱発電所」と字面や説明文だけを追って理解した気でしたが、今回の視察により、その実態を理解するには実際に自分の目で確かめることが不可欠であると改めて感じた。
- ・原子力発電所の高コストによる過剰に見える程の安全設備対策、また地熱発電所の高いイニシャルコストを回収するまでの年月、こういったことを現場で学ばせて頂くにつけ、工藤先生が仰っていた「エネルギー問題は電力会社だけの問題には非ず」「エネルギーミックスは、それを享受する国民ひとりひとりが考えていかなければいけない」という課題について、もっと広く周知され、国民的な議論がなされなければならないと思う。
- ・ホンダ太陽工場の視察も意味深い経験となった。障がいのある方々が、働くことで生甲斐を得るために、「保護ではなく、働く機会を」と訴えた中村裕医師や、その理念に共感したオムロン、ソニー、ホンダといった企業の経営者とのストーリーに初めて触れ、心が動かされた。ホンダは連結で2%以上という高い採用実績を維持しているとのことだが、他の自動車メーカーにも可能な限りこういった目標を掲げて欲しいと思う。

▼ 業種間交流会全体を振り返って

- ・工藤先生の御計らいで、広瀬大分県知事や工藤日出町長との懇談の場に参加させて頂くなど、とても得難い体験となった。地方経済の活性化を推進する首長のお考えを直接伺うことができ、有意義な時間となった。
- ・雄大で穏やかな九州の風景を目にしながら、工藤先生から広瀬淡窓のお話を聞き、また悲惨な戦争の痕跡を巡った。文化、平和は先人たちの歩み、努力によって築かれていることを改めて感じた。
- ・くらしのリサーチセンターのご尽力により、今回の業種間交流会では、普段お話しさせて頂く機会がさほどないような他業種の方々との交流をさせて頂いた。幅広い業種の方々とお知り合いになれたことは、今後の自分の仕事において非常に大きな財産になると思う。

関西電力(株) お客様本部 お客様サービスグループ
お客様サービスセンター所長 河崎 大平

私は今回、業際間交流会に初めて参加させていただきました。

初日は九州電力さまの川内原子力発電所を見学させていただきました。弊社も原子力発電所はございますが、現在、訴訟の関係でやむを得ず停止しておりますので、やはり稼働中の発電所を目の当たりにしますと、羨ましく、かつ、感慨深いものがありました。

また、二日目は同じく、九州電力さまの八丁原発電所を見学させていただきました。当日は生憎の雨模様でしたが、関西地方では見ることのできない地熱発電所の設備と資源小国である日本において早くから地熱発電に着目して利用されている九州電力さまの努力と熱意に感服いたしました。その後、やまなみハイウェイの大自然に心を洗われながら湯布院へ移動しましたが、ここでもインバウンドの外国人が多かったのは少し驚きました。

そして広瀬大分県知事との懇談では知事の気さくなお人柄と、くらしのサーチセンター工藤専務理事とは旧知の仲ということもあり、非常に和やかな雰囲気の中での懇談でした。県知事という日頃、私たちがあまりお目にかかることのない方の貴重なお話が聞けて非常に良い経験をさせていただいたと思っております。

最終日はホンダ太陽さまを見学させていただきました。障害者雇用施設という事でしたが、設備面で非常に工夫された造りになっており、また、働いている方、お一人おひとりが生き生きとお仕事されている姿に感銘を受けました。そして的山荘での昼食をとりながらの工藤日出町長さまと懇談させていただき、日出町や的山荘の歴史など貴重なお話をきかせていただきました。その後、城下カレイの説明を聞き、養殖場を見学させていただきましたが、日々、たゆまない努力と研究があつてこそ、美味しく安定したカレイの供給が出来ていることがよくわかりました。

ここで私どもは飛行機の都合により途中で失礼させていただきましたが、今回の業際間交流会全体を通じまして、日頃、見学や体験することの出来ない施設などの見学、異業種の方々との交流を通じまして自らの知見を高めることが出来、また、今後の業務にも活かすことの出来る貴重な経験をさせていただいたと思っております。

最後に、くらしのサーチセンター工藤専務をはじめ、ご参加されておられました方々、そして、幹事としてお世話になりました九州電力の皆さま、ホンダの皆さま、本当にありがとうございました。

はじめに訪れたのは、九州電力殿川内原子力発電所並びに八丁原地熱発電所。いずれの電源も地球温暖化の原因となる二酸化炭素を排出せずに、安定的に電力の供給ができる期待のクリーンエネルギーである。その一方で両電源に反対する人達もおり、特に原子力に対しての風当たりは強い。川内原子力発電所は620ガルの揺れにも耐える対策を講じている。熊本地震による川内原子力発電所の揺れは、わずか8.6ガルだったにも関わらず即時停止などを求める声がある。川内原子力発電所が再稼働したのは、原子力規制委員会の厳しい要望にきちんと応えた結果である。この世に万能な電源はまだ存在せず、どの電源にも強みと弱みがある。我が国は資源小国であり、電源を適切なバランスで組み合わせるエネルギーミックスが重要である。

次に、広瀬大分県知事を訪問。今回の地震における特徴は、観光産業へのダメージ（大分県の死者はゼロ）。大分県では別府、由布院など温泉地の震度が大きく、20万人の予約キャンセルがあった。熊本県は34万人、九州全体で86万人のキャンセルがあった。今夏には観光客に戻ってもらおうと近々旅行クーポンを発行するなど観光対策に力を入れているところ。九州を訪れることが応援になる。

続いて、ホンダ太陽・ホンダ R&D 太陽殿を訪問。社内ではモチベーションを大切にしている。本田宗一郎氏が「従業員が会社を辞める際にホンダはよい会社だったと云われるようにしたい」と誓ったことを実行したいと思っている、との言葉にグッときた。最後に工藤大分県日出町長と懇談、その後、日出町が県などと協力して運営している名産高級魚城下カレイの養殖場と大神回天基地記念公園内の人間魚雷回天を視察。太平洋戦争末期、本土への空爆が始まり劣勢に立たされると、魚雷を改造し自らが操縦して敵艦に体当たりする人間魚雷作戦が採用された。この人間魚雷は「天を回らし戦局を逆転させる」という意味から「回天」と名付けられ、回天で226名、回天搭載潜水艦8隻で847名、合計1073名の若者が回天作戦に散った。多くの方々の犠牲の上に現在があることを忘れてはならない。

そのほか、九州新幹線は熊本地震の影響により臨時ダイヤで運行している（博多～鹿児島間の本数が少ない、熊本～八代間は徐行運転）など、今回参加する機会に恵まれたことにより九州の様子が実感できた。現場に足を運び現物を見て現実を知るという三現主義が重要だと改めて感じた次第である。

3日間の旅行の初日、6月8日、川内原発見学後、九州新幹線を久留米で降り、日田へ向かうバスの中で、工藤先生が配布なさった廣瀬淡窓の資料の中の「咸宜園」の文字を、日田の町の中で見かけたことを思い出した。

川内で旅に合流するため、6日に日田に東京から乗ってきた車を置きに日田を訪れた時に、この文字の案内板を見ていた。

思い返せば、1961年3月、最初の九州旅行で、日田・彦山線という線名に接して以来、変わった線名だと思っていた。鹿児島本線・日豊本線・筑豊本線とは異なるローカルな線名で、北九州筑豊炭田に網の目のように敷設された運炭鉄道とも違った印象を受けていた。また、この日田・彦山線が久大線に接続する「夜明」という駅名も忘れられない名であった。

前夜の美味しかった食事を思いながら、未だ雨の降らない朝、廣瀬淡窓ゆかりの「咸宜園」を見に行った。園の周辺は整備されており、萱葺きの「咸宜園」のさきに咸宜園教育研究センターと思しき近代的な建物がある。この頃から雨が降り出したが、さらに近くの豆田町にある廣瀬淡窓邸を訪れることにした。

豆田町周辺は、全体に黄土色・道もむやみに広げられておらず、無電柱化され昔の風情を残していた。宿泊したホテルのある駅周辺のどこにでもある雰囲気とは異なっていた。天領であったこと・文化的にも優れていたこと等を偲ばせた。廣瀬淡窓邸は間口が広く「うだつ」を持つ建物で、豊かさを感じさせた。これらのことが、日田・彦山線存在の理由であったのだろう。既に出発の時刻が迫り、またいつか時間を作って訪れることを心にきざみ、後ろ髪を引かれる思いを持ちながら廣瀬淡窓邸を後にした。

この日、地熱発電所を見学した後、大分県庁で県知事 廣瀬勝貞氏のお話を伺った。知事は廣瀬淡窓の末裔とのこと。印象深い一日となった。有難うございました。

東京ガス(株) リビング本部 お客さまサービス部 お客さま相談室
課長 相馬 春樹

熊本地震（本震4月16日）を襲ったM7.3の震災から約2か月後、6月8日から10日まで、くらしのリサーチセンター主催の第65回「施設・工場視察、業際間交流会」に参加することができた。視察にあたり九州電力(株)様、本田技研工業(株)様のご尽力の基、実現することができ、ご尽力いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

熊本地震による西部ガス(株)が被害を受け4月18日時点で、合計約10万5,000件でガスの供給を停止しました。日本ガス協会の要請に基づいた「ガス復旧応援隊」を通じて弊社も第一陣、第二陣合わせて1,300名を派遣し一日も早いガスの供給再開を目指し、復旧活動に取り組み5月3日をもってガス復旧応援隊を解散しました。

改めて熊本地震の被災者の方々にお悔やみとお見舞いを申し上げます。

初日の6月8日は九州電力(株)川内原子力発電所を厳重なセキュリティの下、視察。

川内原子力発電所1号機は昭和59年7月、2号機は昭和60年11月に共に89万kwの出力で運転を開始している。

東日本大震災後の平成23年5月と9月にそれぞれ定期検査後、原子力規制委員会の新規制基準が施行され審査会合（71回）や原子力規制庁のほぼ毎日のヒアリング（913回）等での意見を反映した結果、昨年9月に1号機、11月に2号機が通常運転再開することができた。

何よりも安全確保を最優先した発電所の運営が求められていることを再確認した。

二日目は大分県玖珠郡九重町にある八丁原発電所（地熱発電所）を視察。

九重町といえば「九重・夢・大吊橋」で有名です。2006年10月に長さ390m、高さ173mの日本一の人道大吊橋である。橋の上からは「日本の滝百選」に選ばれ雄大な景色が満喫できるそうです。しかし、2015年12月に開通した静岡県三島市に三島スカイウォークが長さ400m、高さ70.6mが日本一になった。高さは九重が173mと日本一です。

残念ながら視察一行は人道大吊橋を渡ることができなかった。

八丁原発電所は日本最大の地熱発電所として1号機、昭和52年6月、2号機が平成2年6月運転開始し共に5.5万kwの出力で運転している。

マグマの熱で高温になっている地下岩盤の地下水を蒸気井じょうきせいで取り出して発電に使い、残った熱水を再度地下に戻している。地熱という国内資源を有効に活用した発電方法と言えますが、厳しい規制として公園法、自然法から自然の景観に周辺環境との調和を図ることが求められているそうです。

午後は工藤芳郎副会長 専務理事の出身県であるのを期に大分県知事を表敬訪問することができた。広瀬勝貞知事は元経済産業省事務次官を退官後、平成15年4月大分県

知事に就任、昨年4月再任し4期目に入りました。県の総人口は116万人強だそうです。

産業観光振興状況等の話を聞くことができ製造業は造船や食料品、家具製造業等の従来からの製造業に加え、鉄鋼、科学、輸送機械、電子部品、情報通信等の最先端の技術を持つ企業がバランスよく立地し、製造品出荷額等の10年間（H16～26）の伸び率は35.5%増で全国第1位である。また、再生可能エネルギーの自給率28.1%も全国1位であった。

三日目は工藤芳郎副会長 専務理事の出身である日出町ひじまちにあるホンダ太陽(株)を視察。ホンダ太陽は「太陽の家」創設者の中村 裕と本田宗一郎の「障がいのある人達の社会的自立の促進」という理念のもと本田技研工業(株)の特例子会社として1981年9月に設立され今年で35周年になるそうです。

働く一人ひとりが、障がいの有無に関係なく持ち味を生かし仕事を通じて社会の役に立つ「世界のモデル企業」となることを目指しています。多くの皇族方も訪問され励ましのお言葉を述べられているそうです。

ホンダ太陽は健常者と障害者が一緒に働き「障害者」としてではなく「一人の人間」として社会に役立ち、普通に生きてゆくことを目指して「何より人間一夢・希望・笑顔一」で高度な技術力により2輪車、4輪車汎用の各部品は世界中から信頼を得ています。何らかの障害者を持つ従業員は全従業員の85%を占めています。何よりウォッシュレット・乾燥およびTVリモコンの発案はここから生まれ、各メーカーに依頼して創られたそうです。

昼食は大分県日出町総人口2.8千人強の町長である工藤美見さんと会食する機会を得た。日出町は海の城下町であり1601年、豊臣秀吉の正室・ねねの甥にあたる木下延俊が日出藩を与えられ日出城を築城した初代藩主である。現在は日出城祉を中心に武家屋敷や商人、寺社などが点在し、別府湾を一望できる観光名所にもなっている。

特に城下カレイ（マコガレイ）の養殖に力を入れている養殖場を見学した。マコガレイは丸味があって、肉厚であることから周年高値で取引されているそうです。その後、回天記念公園を視察した。実物大の人間魚雷「回天」が展示してあり、目的として脱出装置がない兵器として上官が発案し「天を回らし戦局を逆転させる」という意味で「回天」と名付けられたそうです。昭和20年8月12日、出撃待機命令を受けたが終戦を迎え出撃しないまま終戦を迎えた。同月下旬大神突撃隊は解隊されたが犠牲者は基地内で1名のみが自決されたそうです。

再び戦争を繰り返すことのない、平和な時代を築いていくためには、歴史に戦争の真実を学ぶことは、平和な時代の構築・実現に向けた大きな第一歩だと思いました。

最後に第65回「施設・工場視察、業際間交流会」に参加して貴重な見学をすることができました。また、歴史も学ぶことができましたことを改めてお礼と感謝を申し上げます。

初日、今回の視察のメインである九州電力川内原子力発電所を訪問。3.11 東日本大震災による福島第一原発の事故を受けて、原子力規制委員会が新たに定めた規制基準に合致すべく、数々の安全対策とセキュリティ強化策がとられている様子がよくわかった（残念ながら建屋内には入れなかったが・・・）。万が一の際の冷却手段、電源供給、爆発防止、放射性物質拡散対策等々、各種設備が十分に配備され、しかも同一設備を分散配置するなどハード対策はとられているが、有事の際にこれらを真に有効活用するためにも事故対応訓練等を計画的に行う必要性を強く感じた。過剰すぎるほどの対策（コスト）とも思えなくもないが、規制委が要求する再稼働要件に合致させるために、そして何よりも国民の安全のためには重要なことであり、併せて地域住民や国民の原子力発電に対する理解・広報活動の必要性も感じた。

二日目は、同じく九州電力の八丁原地熱発電所。原子力に次ぐ第4の火とも言われる地熱発電は、地球温暖化防止の観点からも CO₂ 排出抑制効果の高い自然エネルギーとしてその活用普及が期待されているが、火力や原子力に比べると発電単価が高いのが難点とのこと。熱源を探り当てるための地下調査を経て、試験井戸を何本も掘るため、開発までのリードタイムが長くイニシャルコストが高くなることがその要因だが、純国産エネルギーを活用できるという点から考えると、コストとの見合いではあるが、火山列島日本はもっと自前の資源を有効に活用できるのではないかという印象を持った。

最終日の視察先はホンダ太陽とホンダ R&D 太陽。今回の視察対象地域が九州（鹿児島～大分）であり、大分に立地する弊社特例子会社であるホンダ太陽への視察依頼を受けて実現した。ホンダ太陽としても、障がい者と健常者がともに働く現場を観ていただくことは、ホンダが目指す活動を理解してもらうチャンスであるとの考え方で積極的に工場視察を受けているとのこと。社長以下、役員、工場長等、万全の体制でご対応いただいたおかげで、視察メンバーの皆様にはホンダの取り組みの一端をご覧いただけたのではないかと自己満足している。

大分県知事や日出町長との面談では、知事や町長自ら、大分県の被災状況や産業政策の取り組みなどの説明や的山荘の紹介を行っていただいた。その他、城下かれいの養殖場や戦争遺跡「回天」記念館を視察して無事行程を終えた。いずれの視察先も、ご多忙中にもかかわらず丁寧かつ親切なご対応をいただき、改めて感謝申し上げます。

今回の視察は、熊本地震の影響で当初予定したルートの変更もあって、移動時間・距離ともに長いハードなスケジュールではありましたが、通常では体験できないような機会を得られたことは、貴重な経験となりました。

まず始めに、4月14日に発生した熊本地震により被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。また、そのような中でも今回のような貴重な機会を企画・運営頂きました九州電力様はじめ地元自治体の皆様、くらしのリサーチセンター事務局の皆様に御礼申し上げます。

今回の交流会では、九州電力様の原子力発電所や日本最大規模の地熱発電所などのインフラ施設を見学させて頂きました。私自身は稼働中の原子力発電所を視察することは初めてでしたが、新規制基準へ適合するための様々な対策や、当日に現地で行なわれておりました緊急時に向けた訓練など、日々の安定供給の裏側で様々な努力やご苦労があることがよく理解できました。

また、2日目に見学させて頂いた八丁原地熱発電所では、地熱発電開発の歴史から世界における開発状況まで幅広く学ぶことができました。特に、地熱発電に適した地層を試掘により掘り当てる確率が90%以上であることや、地熱発電に関心を持つ様々な投資家がヒアリングに訪れていることなどに驚きました。

2日目の午後から最終日にかけては、大分県の産業政策や日出町における地元企業の取組みについて学ぶことができました。大分県の産業政策については、広瀬県知事自らが我々に対してご説明頂き、日出町の地元企業の取組みについても町長と意見交換を行なえるなど、くらしのリサーチセンター様の広いネットワークでしか実現できない貴重な経験をさせて頂き、大変感謝しております。

私は今年4月よりセンターの会合に参加しておりますが、今回の交流会を経て参加者の皆様との懇親を一層深めることができました。特に今回はエネルギー関連施設の見学が多く、また普段では決して見る事の出来ないものばかりだったため、自社が関わる天然ガスにとどまらず幅広い知見が得られたと思います。繰り返しにはなりますが、今回このような機会を与えて頂いたことに感謝するとともに、今後もセンターの会合や交流会に参加して色々と勉強したいと思います。引き続きよろしくお願いたします。

今回、Hondaさまの特例子会社であるホンダ太陽(株)さまを訪問し、同社における障害者雇用の取り組みを見学させていただいたが、障害者雇用のあり方を考えさせられる非常に有意義な視察であった。

同社は、1981年に、「人間尊重」というHondaさまの基本理念の下、心身に障害はあっても健常者と共に働ける雇用の場づくりと、社会的自立の促進を目指して設立され、現在、大分県日出工場で、二輪車・四輪車・汎用製品の部品等を製造されている。

工場内は、全ての施設、設備は誰もが使えるユニバーサルデザインで整えられており、障がいのある人もない人も効率的な作業が出来るように治具の改善、工夫を継続して実施されていることが非常に印象に残った。

また、障害の有る無しに関わらず、全社員がお互いのことを十分に理解し、甘えることなく、甘やかせることもないという職場風土が出来上がっていることも素晴らしいと思った。

同一労働同一賃金のもと、仕事に健常者との違いはなく甘えは許さない厳しさもあると思うが、保護よりも仕事のチャンスを創出し、障害者の方の自立を後押しするというホンダ太陽さまの考えを、我々も含めてあらゆる企業において浸透させていかなければならないと痛切に感じた。

Hondaさまが、障害者の直接雇用を実践し、先駆的な実績を蓄積されるとともに、企業の社会的責任（CSR）を果たされていることに、心より敬意を表したい。

(最後に)

今回の「第65回施設・工場視察、業際間交流会」につきまして、弊社の不手際により参加者の皆さまにご迷惑をお掛けすることも有ったかもしれませんが、おかげさまで無事に視察を終えることができ、非常に安心いたしました。改めて御礼申し上げます。

電気技術開発(株) 電力技術本部
上席執行役員本部長 変電部 部長 宮澤 弘

歴史の有る「視察・工場視察、業際間交流会」に初めて参加させて頂きましたが、通常業務の中では経験できない首長と懇談会や障がい者雇用の現場を拝見でき大変良い経験をさせて頂き、自身の知見も広がりました。

私自身は、入社以来電気設備の技術者として種々の技術系見学会・視察会等に参加してきましたが、大分県知事および日出町町長との懇談会並びにホンダ太陽株式会社等の障がい者雇用の実情を視察することが出来、市町村が抱える問題点や障がい者雇用に対する考え方・対応の仕方等を知ることが出来、大変良い経験となりました。

特に、ホンダ太陽株式会社様およびホンダアールアンドデー株式会社様の基本理念この世に「障害者」という人種はいない。また同じ人は一人もいない。人にはそれぞれ他にはない固有の素晴らしい「持ち味」がある。その違いを認め合う中に、一人の人間としての自立が生まれる。例え心身に障害はあっても人生に障がいはない。「障害者」としてではなく「一人の人間」として社会に役立ち、普通に生きてゆく。

この文章に非常に感銘を受け、社内の報告書にも引用させて頂きました。

業際間交流会の中で、参加者の方々の各立場における各視察場所の意見や考えを聞くことが出来れば、さらに自身の参考になったのではないかと思います。

私自身はまだまだ、技術者または技術系管理者としての目線またはものの考え方が強く、各業種・各立場からのものの考え方・見え方を知ることが出来れば、さらに自身の業務に対して考え方や判断に広がりが出来、良い参考になったのではと感じております。

最後に、工藤団長を始め幹事の本田技研工業株式会社深尾様、九州電力株式会社服部様にお礼申し上げますと共に、今後も「視察・工場視察、業際間交流会」が未永く継続することを期待しております。